

# 天台維摩經疏における本迹について

井 上 智 裕

## 【序】

本迹の語は、もともと佛教独自のものではなく、中国思想の用語をもとにしたものとされている。先学の研究によれば<sup>(1)</sup>老莊の思想から強い影響を受けたものとされ、『莊子』の「天運編」において、

夫れ六經は先王の陳述なり。豈に其れ迹する所以ならんや。今、子の言うところは、猶お迹のゞときなり。夫れ迹は、履の出すところなり。而て迹は豈に履ならんや。

〈傍線部加筆、以下同じ〉（新釈漢文体系『莊子』四四三頁）  
とある。ここで言う迹と、その迹を出す「履」あるいは迹する所以との関係をもとにして、佛教においては、迹する所以である「本」は仏や理そのものであり、「迹」はその本によつて示される物事であり、本を具体的に顯すものとされる。この本迹の論理は羅什門下において『法華經』解釈に用いられ<sup>(2)</sup>、羅什の弟子の僧肇は『注維摩經』の序に、「本に非ざればもつて迹を垂ること無く、迹に非ざれば、もつて本を顯すこと無し。本迹、殊なりと雖も不思議一なり」（大正藏三八・三二七a～b）と本と迹とについて記している。

天台大師智顗は、この僧肇の本迹の一文をしばしば引用し、独自の本迹論を展開していく。『法華玄義』において『妙法蓮華經』の經典名を解釈する中、「妙」の解釈において迹門の十妙、本門の十妙をたてており、「序王」における「蓮華」の解釈では、蓮華の三つの譬えを本迹の二つによつて説明をする。<sup>(3)</sup>また『法華玄義』の序に弟子の

灌頂は、「玄意は文心を述ぶ。文心は迹本を過ぐること莫し。」（大正藏三十三・六八一-b）と本迹の重要性を強調している。さらに『法華文句』では『法華經』二十八品を序分・正宗分・流通分の三段に区分する科段と、前半の十四品を迹門、後半の十四品を本門として、迹門・本門のそれぞれに序分・正宗分・流通分があるとする一經二門六段との二つの科段をたて理解していくのである。また『法華文句』における天台独自の解釈法である四種釈では、本と迹との関係によつて経文を解釈する本迹釈が用いられるよう、天台の『法華經』解釈において本迹は重要な概念である。そして本迹釈について『法華文句』卷一上には、

若し他經を釈せば、但だ三意を用うる。未だ發本顯迹せざるが為の故なり。當に知るべし、今經の三釈は他と同じく、一釈は彼と異なる。

（大正藏三十四・三c）

とあり、『法華經』以外の經典では、本迹釈を用いないが、『法華經』の解釈においては本迹を含む四種釈を用いるというのであり、本迹釈は『法華經』解釈独自のものとされる。また、智顥の『維摩經』の文々句々を解釈した『維摩經文疏』卷三においても、

若し法華經を講ずるに、必ず須く本迹に約して義を明かし同聞歎德を解釈すべし。今の經は、既に未だ本を發し迹を頗ざされば、但だ因縁、事解、觀行を釈するのみ。

（新続藏十八・四七七c）

として、『法華經』解釈においては必ず本迹釈を用いるのであるが、『維摩經』の解釈では、本迹釈は用いずに因縁事解・觀行のみによつて解釈するというのである。

しかし、先学の指摘するところではあるが『維摩經文疏』卷二に「毘耶離菴羅樹園」の句を解釈するところに、言う所の広博嚴淨とは、即ち是れ釈迦法身所居の本土なり。常寂光国、其の性、広博にして猶お虚空の若し。功德智慧、諸の穢惡無し。故に嚴淨と云う。迹、人間に居するも亦、広博嚴淨の土に託す。是に知ぬ。本に非ざれば、以て迹を垂ること無し。迹を垂るるが故に、人間、嚴淨の國に居す。迹に非ざれば以て本を頗ざすこと無し。毘耶離に寄せて、諸佛の国土、永く寂にして虚空の如しと説く。即ち毘盧遮那常寂の本国を頗す也。

(新続藏十八・四七五b～c)

と、法身の所居を本、人間の所居を迹として、その関係を本述によつて説明しており、本述を用いた解釈が維摩經疏においても見られることが指摘されている。また、『維摩經玄疏』卷五では、

此の經の始め従り末に至るまで、本述の義を用いて玄義及び文意に往通す。見る可き也。

とあり、『維摩經』の解釈においても本述の義を用いることが明確に述べられているのである。さらに『維摩經玄疏』卷三に、

言う所の本述とは、本は即ち所依の理。迹とはれ能依の事なり。事理、合して明す。故に本述と称す。  
(略)：所依の理本に由りて能依の事迹有り。能依の事迹を尋ねれば所依の理本を得。本述、殊りと雖も不思議一也。

と本述について述べた上で、本述を用いて維摩居士について説明していくのである。

このように『維摩經玄疏』『維摩經文疏』といった天台維摩經疏においても四種釈のひとつとしての本述釈という形はとらないが、本述の論理を用いているのである。そこで本論では、維摩經疏における本述の論理の用い方とその意義について若干の考察を試みる。

## 【二】天台における本述について

まず、天台教學における本述について概観する。『法華文句』では本述釈について以下のように述べられている。若し機に応じて教を設けば、教に權實・淺深の不同有り。須らく指を置きて月を存し、迹を亡じて本を尋ねべし。故に肇師の云く、本に非ざれば以て迹を垂ること無く、迹に非ざれば以て本を顯すこと無し。故に本述

釈を用うる也。

(大正藏三十四・二b)

と、本迹釈について、衆生に応じて教えを説くのであれば、権実・浅深の異なりがあり、その教えを指に喻えて迹とし、教えの目指すものを月に譬えて本とする。つまり、本によつてそれを示す教えとしての迹を垂れ、迹によつて本を尋ねるという基本的な本迹の関係が示される。また『法華文句』釈寿量品で仏身について述べる箇所に、諸經に説く所の本迹とは、即ち寂滅道場に成する所の法・報を本と為し、本従り起こす所の勝劣の両応を迹と為す。今經に明かす所は、寂場及び中間に成する所の三身を取りて、皆な名づけて迹と為す。本昔の道場に得る所の三身を取りて、これを名づけて本と為す。故に諸經と異と為す也。本に非ざれば以て迹を垂ること無く、迹に非ざれば以て本を顕すこと無し。本迹、殊なりと雖も不思議一也。肇師の言は、意は寂場の本に在る耳。

(大正藏三十四・一二九a/b)

とあり、「諸經に説く所の本迹」として、仏身と本迹の対応関係が異なるにしても、明確に『法華經』以外に本迹の概念があるとする。すなわち、『法華經』以外の諸經典に説かれる本迹は、インドに生れた釈尊が悟つて得た三身についての本迹であり、それに対して『法華經』では、寂滅、中間の三身をすべて迹とし、久遠に証得した三身を本とするのである。<sup>(6)</sup>さらに僧肇の述べる本迹は、諸經の本迹と同様に寂滅道場において悟つた仏について述べているのであり、天台の『法華經』解釈における本迹とは異なつてゐると言うのである。この僧肇の本迹について智顕は『維摩經玄疏』において、

今、理行を合して不思議法身の理本と為す。此の法身に由るが故に能く不思議応用の迹を垂る。此の応用に由りて能く法身を顕す。故に肇師の云く。本に非ざれば以て迹を垂ること無く、迹に非ざれば以て本を顕すこと無し。本迹、殊りと雖も不思議一なり。即ち其の義也。

(大正藏三十八・五四五c)

と、法身の理行を本とし、応としての用（はたらき）を迹とするものであつて、これが僧肇の本迹の意義であると理解しているのである。このように、天台において『法華經』における本迹と、それ以外の經典に説かれる本迹と

があるとされ、さらに天台以外の諸師の用いた本迹があるというように、同じ本迹という語を用いるのであるが、その意義は經典やその解釈によつて異なるのである。では天台の本迹についての理解はどのようなものであろうか。以下『法華玄義』の記述について見ていく。迹門と本門の十妙について明かす中に本迹について、

本迹を釈するに六と為す。

本とは理本なり。即ち是れ実相一究竟の道なり。迹とは、諸法の実相を除いて、其の余の種種を皆な名づけて迹と為す。

又、理と事を皆な名づけて本と為す。理を説き事を説くを皆な教迹と名づくる也。

又、理事の教を皆な名づけて本と為し、教を稟けて修行するを名づけて迹と為す。人の依處に則ち行迹有り。迹を尋ねれば處を得るが如き也。

又、行能く体を証すれば、体を本と為す。体に依りて用を起せば、用を迹と為す。

又、実得の体用を名づけて本と為し、權施の体用を名づけて迹と為す。

又、今日顯わす所の者を本と為し、先來已に説く者を迹と為す。

此の六義に約して、以て本迹を明かす也。

(大正藏三十三・七六四b)

と、本迹の解釈が六つに分けられ連続的に論じられている。まず①実相を本として、それ以外を迹とする事理の本迹。②その理と事を本として、その本を説く教えを迹とする理教の本迹。③その理事と教を本として、その教えによる行を迹とする教行の本迹。④その行によって得る体を本として、その体より起こるはたらきを迹とする体用の本迹。⑤実の体用を本として、權の体用を迹とする權実の本迹。そして⑥『法華經』に明かす所を本として、それ以前に説いたものを迹とする今已の本迹と六つの觀点から本迹が論じられるのである。ほぼ同様の本迹に関する見解が『維摩經玄疏』に見られるが、そこでは事理から五番目までの權実の本迹までであり、六番目の今已の本迹が説かれておらず、今已の本迹こそが『法華經』理解における独特なものである。その今已の本迹について、『法華

玄義』では、

六に今已に約して本迹を論ずとは、前來の諸教に已に事理、乃至、權實を説くは、皆な是れ迹也。今經に説く所の久遠の事理、乃至、權實は、皆な名づけて本と為す。今、明かす所の久遠の本に非されば、以て已説の迹を垂ること無し。已説の迹に非ざれば、豈に今の本を顯さんや。本迹殊りと雖も不思議一也。

(大正藏三十三・七六四c)

として、傍線部のように、『法華經』に説く久遠の事理ないし權實を本、それ以前に説く事理ないし權實を迹とする。つまり、久遠実成を明かす『法華經』の立場を明確にしながら、本迹によつて他の經典と『法華經』を不思議一と関係づけ、開会の思想を示すのである。また『法華經』における本迹と諸經の本迹について、『法華玄義』卷九下の宗を明かす中に、

本門の因果は永く衆經に異なるとは、三藏の菩薩の若きは、始め實の因果を行じて、權の因果無し。乃至、佛は道樹にて始めて成ずと明かして、久遠の本迹に非ず。通教の菩薩も亦た始め因を行するに、神通變化して本迹を論ず。久遠の本迹に非ざる也。大品には、菩薩に本迹有り、二乘には則ち無しと説く。仏、始めて生・法の二身を得と説きて、久遠を説かず。淨名には、声聞に本迹有りと説かず。但だ菩薩、不思議の本迹に住すと明かすのみ。佛に淨土有りと説くも、螺髻の見る所は、亦た久遠に非ず。：（略）：今經は声聞に本迹有りと發す。本に因果有り。示して二乘の迹の中の因果と為す。仏の迹を發す。：（略）：今經の迹中の師弟の因果は、衆經と同有り異有り。本の中の師弟の因果は、衆經に無き所なり。正しく此の因果を以て經の妙宗と為す也。

(大正藏三十三・七九五b-c)

とあり、『法華經』の説く本迹は久遠の本迹であり、他の經典と異なるといふのである。そして藏教、通教の本迹を挙げいづれも久遠の本迹ではないとする。さらに『維摩經』の本迹について、菩薩の本迹を明かすのみであつて、聲聞の本迹を明かすことが無いといふのである。つまり『維摩經』は二乗作佛、久遠実成の本迹を説かない爾前の

経典であるから、その解釈において『法華文句』のように本迹釈を用いないことにつながるのである。

このように天台の『法華經』解釈における本迹は法華の開会、二乘作仏、本門の久遠実成の開顯という意義を基としているのである。しかし『法華經』以前の爾前の經典においても、『法華經』とは異なった本迹が説かれるところがあるのであり、その爾前の經典の中、『維摩經』には菩薩の本迹を説くというのである。以下では維摩經疏における本迹の記述に注目していくことにする。

## 【二】維摩經疏における本迹

まず『維摩經玄疏』卷四釈名に『維摩經』の本迹についてまとまつた記述が見られる。その冒頭に本迹の名称の解釈として、

本迹の名を釈すとは、通じて本迹の名は乃ち遍く四教に在るを論ず。今、正しく不思議の本迹を明かさば、正しく円教に就いて、以つて弁ずるなり。言う所の本迹とは、本は即ち所依の理。迹とは、是れ能依の事。事と理と合して明かす。故に本迹と称す。：（略）：所依の理本に由りて能依の事迹を尋ねれば、所依の理本を得。本迹は殊なりと雖も不思議一なり。  
(大正藏三十八・五四五b)

とある。四教すべてに本迹があるとしながらも、不思議の本迹を明かすのは円教によるとする。さらに理と事の関係を本迹として、理によつて事を尋ねれば理を得ると、本と迹、事と理は別であるが、不思議一なるものであるとする。さらに前に触れたが、『維摩經玄疏』釈名にも『法華玄義』とほぼ同様の本迹の義が五つ述べられており、あらためて引用すると、

不思議本迹の義を明かさば、略して五意と為す。一つに事理に約して本迹を明かす。二つに理教に約して本迹を明かす。三つに理行に約して本迹を明かす。四つに体用に約して本迹を明かす。五つに權實に約して本迹を

あかす。一つに理事に約して本迹を明かさば、此の經に云く、無住の本従り一切法を立つ。と。今、不思議の理事を明かして本迹と為すは、理は即ち不思議真諦の理を本と為し、事は即ち不思議俗諦の事を迹と為す。不思議真諦の理本に由るが故に不思議俗諦の事迹有り。不思議俗諦の事迹を尋ねるに不思議真諦の理本を得。是れ則ち本迹、殊りと雖も不思議一也。

(大正藏三十八・五四五b)

とあり、事理、理教、理行、体用、權実の五つによつて『維摩經』を経証しながら本迹を説明していくのである。ここでは『法華經』の立場を説く六番目の今已の本迹が無いが、それ以外の五つめまでは、ほぼ同様の本迹が説かれているのである。その最後の、五番目の本迹について、

五つに權実に約して本迹を明かさば、実とは則ち齊しく、位は真応二身を証得す。即ち是の理実の本也。權化方便して真応二身を現するに、或は高く或は下し。此れ即ち是れ事は物情に隨うが故に事迹と名づくる也。故に此の經に云く、復た成道を示現して転法輪を起すと雖も、菩薩の行を捨てず。今、明す。若し不思議位に由り真応二身を証せんば、理実の本、豈に能く高下、真応の両迹を垂れんや。若し真応の事迹を垂れずんば、豈に能く物をして己に同じく位に入り真応の二身を得せしめんや。是れ則ち本迹殊りと雖も不思議一也。

(大正藏三十八・五四五c)

と、權実の本迹の中、実理を本として方便によつて真応の二身を表して、高下があるものの、衆生の思いに隨う事迹を垂れるというのである。そして、不思議の位の真身、応身によらなければ、迹を垂れることがなく、迹によらなければ衆生を化導して、不思議の位に入らせ、真応の身を得させることができないというのである。この不思議の位について高下が述べられるのであるが、この本迹の高下について、

本迹の高下を辨ぜば、正しく円教に約して以て明す也。：（略）：今、体用・權実に約して本迹を明かさば、応に四句分別を須いるべし。一つに本迹俱下、二つに本下迹高、三つに本高迹下、四つに本迹俱高なり。今、此の義を明かすに、復た四種の分別を須う。一つに十信を明かすに、此の四句に約して以て高下を明かすこと

を得ざる也。

とあり、本迹の高下については円教によつて明かすべきとした上で、本と迹にそれぞれ高下があり、四句によつて分別するとし、円教のいわゆる行位論を用いて五十二位に配して解釈していくのであるが、まず十信位は本迹にあらんないとし、さらに、

二つに十住の初心を明かすに、初發心住は但だ二句を用て分別すとは、初住は但だ本迹俱下、本下迹高の二句有る也。：（略）：三つに第二治地住従り第四十一等覚地に至るを明かす。此の四十一位は一一に皆な得四句を用て分別するを得。義は推して知る可き也。四つに妙覺極地は但だ二句を用て分別するを明かさば、一つに本迹俱高、即ち是れ真応の極、最上の無過也。二つに本高下は、本高は即ち是れ真身の極、最上無過。迹下とは、応じて下の四十一地の像に同ずる。又た九道の形声を示現する也。

（大正藏三十八・五四五c～五四六a）

と続けて、十住の初住の位の本は下であるとして、本迹俱下・本下迹高の二つがあるとする。次に二住以上から等覚までを、中間の位として、本も迹も高下があり四句すべて用いるとし、最後妙覺を、最高の位として本を高として、本迹俱高と本高下の二句があるのである。十住の位は、「円かに一切の法門に入るに住す。所謂の二十五三昧、冥に衆生を益する」（大正藏三十三・七三四a）もしくは「菩薩の円満の業を成就し、能く一切の神通を顯し、三輪不思議の化、法界に弥満し、顕に衆生を益する」（大正藏三十三・七三四a）位とされるのであり、冥顯ともに衆生を利益する位において本迹が論じられるのである。さらに『維摩經玄疏』ではこの本迹の高下を踏まえた上で、維摩居士の本迹について、維摩居士を法身の金粟如來として捉えて、

正しく淨名の本迹を辨ぜば、：（略）：若し實に是れ妙覺の金粟、迹を妙喜の補處と為さば、此れは是れ本高迹下なる可し。若し本は是れ初住の金粟、現じて十地の補處と為さば、此れは是れ本下迹高なり。若し是れ妙覺の金粟法身、又た応じて妙覺の金粟と為さば、是れを本迹俱高と為す。若し是れ初住の金粟、応じて三藏の

補尅と為さば、是れを本迹俱下と為す。豈に其の優劣、高下の位を定判すべけんや。大聖は無方の化を以てす。豈に是れ凡夫の測量して深浅を判ぜんや。

(大正藏三十八・五四六c)

と、維摩を初住以上妙覚までの位にあてて解釈し、本迹の高下があるとする。しかし、その不思議の位について、佛・菩薩の化導は無方であつて定められないのであり、まして凡夫がその優劣を論じるべきでは無いと結んでいる。さらに『維摩經玄疏』では、この円教の本迹に続けて、別教の本迹について、

別教に約して本迹を明かさば、また備に四種の本迹を用うるを得。円教に類して知るべし。ただ全用するを得ず。すなわち地前の三十心はいまだ法身を得ざるがゆえに、本迹は無し。ただ初地に二句を明かす。：（略）

：二地より等覚に至るは、みな四句分別するを得。：（略）：後の妙覺の極地もまた、ただ兩句を用う。円教の妙覺に類して知るべし。これみな有教無人、ことごとく円教の權迹なり。

(大正藏三十八・五四六b)

とある。ここで円教と同様に本迹の高下を論じるのであるが、本迹は法身において論じるとされる。そして別教初地以上に本迹を論じるのであるが、有教無人であるから、すべて円教の權迹というのである。さらに通教の本迹について、

通教に約して本迹を明かさば、通教は四種の本迹を明かすを得るも、すでに中道仮性を弁ぜず。真・応の二身は、あに本迹を分別すべきことあらんや。ただ還りて通の義に約して往釈す。：（略）：八地に道觀双流す。

あに中道仮性の理を知らざらんや。ただ教門に約して抑え畢る。ゆえに真應を明かさざるのみ。恐らくはこれ、多くはこれ有教無人、ことごとくこれ円教の權迹なり。

(大正藏三十八・五四六b)

と、通教においては中道仮性を論じないのであるから、本迹を分別することがない。また八地以上に中道仮性の理を知るというのも教門の説であつて、別教と同様に有教無人であり、円教の權迹であるというのである。藏教についても同様に円教の權迹として本迹を論じるというのである。このように四教の本迹について論じるのであるが、いずれも円教の權迹とされ、その基盤を思議を超えた円教に置いてるのである。さらに『維摩經玄疏』では、

問うていわく、一切の凡聖にことごとく本迹を明かすことを得んや。

答えていわく、本迹の義は、正しく真・応に約す。有余の諸經、すでに無明を破するを明かさず。なおこの義無し。何に況や凡夫をや。ただ通じて論を為さば、別教の三十心、および通教の菩薩は、すでに本迹を論じることを得。二乗もまた本迹を得。三藏の菩薩は惑を断ぜざるも、なお本迹を論ずるを得。凡夫もまた本迹を論ずることを得。

(大正藏三十八・五四六b～c)

とある。ここで問答を用いて、凡夫を含めてあらゆるものに本迹を明かすのかと問い合わせ、その答えとして、本迹の義は真身、応身に約して論じるものとし、無明を破することが本迹を論じる前提とされるのである。しかし後半の部分では、通の解釈として、前の藏、通、別において本迹を論じないとした位と凡夫にも、本迹と論じることができるともいうのである。具体的に「通じて論じる」という解釈は見られないが、四教や行位の枠組みに依るのでは無く凡と聖を通じて見るのであれば、凡夫においても本迹を論ずることができるというものであろう。しかし、この後の解説には、「凡夫、尚お自ら己が業行の果報を識らず。何に況んやその本迹を知らんや。」(大正藏三十八・五六c)と、この凡夫自身には、その本迹を知ることは無いとする。また維摩經疏の多くの説明においては、問答の前半のように、格別に四教や行位論を用いて無明を破し、法身において本迹を論じる立場が用いられているのである。そして、より具体的に『維摩經』の教説と本迹との関連について、

今、本迹を明かして此の經文に通ずれば即ち三意と為す。一つに室外に通ず。二つに入室に通ず。三つに出来室に通ず。一つに室外に通ずとは、室外に長者の形を現じ、四教に寄せて以て本迹を顯す。或は三藏・通教の本迹を用て空に入り、國王・長者を開化す。或は通別圓の本迹の教を用いて十大弟子、五百羅漢を折挫す。或いは但だ圓教の本を顯すを用いて三教を裏ぐる菩薩等を彈訶す。二つに室内に通ずとは、室内とは、疾に託して教を興し、病行を示して、一切衆生の実病に同ず。衆生の疾、多塗有りと雖も、其の正意を論ずるに四種を出でず。今、四種の迹の病行を以て四種の実病に同ず。即ち是れ病行の迹を現するを問疾品と為す也。次下の五

品は皆な此の品従り出す。若し問疾品に通じて下の五品は皆な自ら通ずる也。三つに出室に通ずとは、掌擎の大衆は菴羅に來入して、病愈の相を示す。衆生の四種の病、滅するに因りて、淨名の權迹の病も亦た愈ゆ。是れ則ち此の經の始め従り末に至るまで、本迹の義を用いて玄義及び文意に往通す。見る可き也。

(大正藏三十八・五四七a)

と述べて、『維摩經』の教説を室外、室内、出室に分け、その教説それぞれついて本迹によるというのである。つまり、方便品において国王長者を、弟子品において十大弟子を、菩薩品において菩薩を彈呵したのは、維摩居士の四教の本迹による教えであり、病を表したのも衆生に応じ、化導するための迹であり、病の癒えるあり方を示すことは維摩の迹の病も癒えるということである。そして『維摩經』における維摩の教説すべてにおいて本迹によるとし、『維摩經玄疏』や『維摩經文疏』の解釈に通じるというのである。さらに『維摩經文疏』卷十六では、より端的に、

今、當に実の如く判釈すべし。諸菩薩と淨名と皆な本迹有り。權なれば則ち同じく權。實なれば則ち同じく實。但だ是の法身の大士、共に來りて佛を輔けて權実二教を顯し、衆生を成就す。

(新続藏十八・五八四b)

として、菩薩も維摩居士にも本迹があり、それは法身の菩薩であるというのであり、仏を助けて教を顯し衆生を教化していくといふのである。つまり、天台の『維摩經』理解において、經典に見られる衆生を化導するための法身の菩薩による教えや具体的あり方が迹であり、その迹によつて衆生を本に導くといふのである。したがつて『維摩經玄疏』には法身の体用や權實までの五重によつて本迹を述べているのであろう。

この『維摩經』における本迹について、經文の解釈ではどのようなになつてゐるのであろうか。先学の指摘している『維摩經文疏』「毘耶離菴羅樹園」における本迹の解釈の箇所では、

第二に法門に対し解釈すとは、隨て前の翻する所を取りて、即ち法門に対す。言う所の廣博嚴淨とは、即ち是れ釈迦法身所居の本土なり。常寂光国、其の性、廣博にして猶お虚空の若し。功德智慧、諸の穢惡無し。故に嚴淨と云う。迹、人間に居するも亦、廣博嚴淨の土に託す。是に知ぬ。本に非ざれば、以て迹を垂ること

無し、迹を垂るるが故に、人間、厳淨の国に居す。迹に非ざれば以て本を顕すこと無し。毘耶離に寄せて、諸佛の国土、永く寂にして虚空の如しと説く。即ち毘盧遮那常寂の本国を顕す也。……（略）……本に由りて迹を垂れ、迹を垂るるが故に好道と名づく。迹に因りて本を顕す故に人間好道の国に居して心淨、佛土淨を説く也。

（新続藏十八・四七五b～c）

とあり、ここでは本迹釈というのではなく、法門に対する解釈というのであるが、その内容は本迹の論理による解釈である。ここで佛の理として常寂光土を本として、虚空のようなものであり、穢惡が無いから厳淨というのであるとした上で、本より迹を顕し、人々の中に居して身を顕すのであって、その迹である所居によせて、本である常寂光土を顕すというのである。この所居の佛土にことよせる本迹について、佛国について解釈するなかでは、

佛國に事有り理有り。事は即ち應身所居の域なり。理は則ち極智所照の境に約す。而して至理虛寂の本、境智の殊り無し。豈に能居の界域の別有らんや。但だ機に隨いて物を化するを以て、其の真應両身を説く。故に事理二土を明かす也。然るに本に非ざれば以つて迹を垂ること無し、故に應形應土有り。迹に非ざれば以つて本を顕すこと無し、故に物を引きて同じく法身の真國に帰す也。

（新続藏十八・四六五c）

と、佛國に事と理とがあるとした上で、本によつて衆生に応じる土があつて迹を垂れるのであり、衆生に応じた迹によつて、衆生を化導し本の所居に導くというのである。この『維摩經文疏』における本迹の用い方も、『維摩經玄疏』と同じよう真應の二身によつて衆生を化導する権実の本迹と同様の論理と見られるのである。

このように維摩經疏における本迹は、『法華經』の開会や本門の開顕などを基とする本迹とは異なり、爾前の經典としての本迹の論理が用いられる。その本迹は、中道仮性の理を見る法身の菩薩により、衆生への応として迹を垂れ化導するという意味で論じられているのである。その法身を得、無明を断じ、中道仮性の理を見る本としてのありかたと、衆生を化導する迹としてのありかたを不思議一として論じ、それを經典の解釈にも用いてるのである。

### 【三】経体と本迹について

『法華經』解釈と維摩經疏における本迹について見てきたのであるが、智顥がこのような本迹を論じる基盤はどうあるのであらうか。『法華玄義』卷七のなかに、

実相の理は、本迹の因果に当らざれども、理に約して本迹の因果を明かす耳。

(大正藏三十三・七七二b)

とある。実相の理自体は本迹の因果そのものではないが、実相の理にことよせて本迹の因果を明かすというのである。つまり実相の理を基として本迹を論じていくのであり、実相の理を顕すために本迹の因果を用いていくのである。また、この本と迹との因果について『法華玄義』では、

衆経の因果の同異とは、謂わく、迹の因果は或は同じく或は異なる。本の因果は永く異なる。迹の因果は、実相は通じて諸の体に印す。何れの經か此れに約して因果を論ぜざらん。

(大正藏三十三・七九五a)

として、本の因果は『法華經』独自のものであるが、迹の因果においては『法華經』以外の經典と同じである面もあるとする。さらに經典に共通して実相を体として因果を明かすのであるというのである。つまり、諸大乗經典において迹の因果は明かされているのであり、それは実相の理を体としていることによるというのであらう。実相を體とすることは『維摩經』も同様であり、『維摩經玄疏』卷五では、

衆経の体と為すとは、諸の摩訶衍經には、皆な実相、不思議真性解脱を用て体と為す也。

(大正藏三十八・五五九a)

と、大乗の經体は、実相であり、『維摩經』の副題である不思議解脱が經体とされるのである。大乗經典すべての体を実相とするのであるが、その体について『法華玄義』の顯体章では、

傍正の料簡とは、衆経は半滿小大の殊りありて、体に傍正有り。正は即ち実相、傍は即ち偏真なり。偏真は或

る時には実相を含み、実相は或る時には偏真を帶ぶ。而も通じて実相と称す。：（略）：傍正は悉く経体なり。

（大正藏三十三・七九三 a～b）

として、さまざまの經典では、体において傍である偏真と正である実相があるとし、偏真に実相を含むとき、実相が偏真を帶びる時があるというのである。しかし、まとめて実相というのであり、すべて経体とするとされるのである。そして『維摩經』の經体について『維摩經玄疏』では、

若し是れ、法華經の正直捨方便は、但だ円教の一の真諦なるを用いて体と為すを得べし。此の經には、猶お通別の二種の方便を帶して、理内の三種の真諦は皆な此の經の體と為すことを得る也。但だ傍正有り。不思議の真諦を正と為す也。（大正藏三十八・五五七 a）

とある。『法華經』は圓教の真諦のみを體とするのであるが、『維摩經』においては通教・別教の真諦も含めて經の體とするのであり、傍正があるとされる。実相に偏真や方便を帶するとされるのであるが、『維摩經』も含めた大乗經典において、體は実相とするのである。つまり、実相として傍正の異なりがあるのである。『法華經』と同様に実相を體として捉えることによって、その実相を顯すために、『維摩經』においても本迹を論じてゐるのである。

## 【小結】

このように、四種釈の本迹釈や、『法華經』解釈に用いられる本迹は、開会や久遠実成、二乘作仏といった『法華經』の思想に基づくものであり、維摩經疏など他の經典の解説には用いないとされているのである。それは、教相三意の示すように『法華經』独自の立場によるものである。しかし本迹の用語は維摩經疏にも見られ、それは法身の垂迹、真と應との関係を示すものとして用いられているのである。このような本迹の用例は、現存する中国最古の『維摩經』の解釈である『注維摩經』においても、佛・菩薩を論じるなかに見られるが、智顥は、大乗經典の

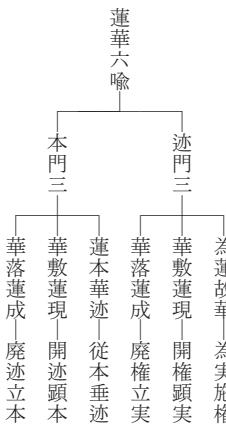
経体を実相として捉える經典觀によつて、本迹を用いる基盤を実相に置いてゐる点にその特徴が見られるのである。

(大正大学綜合佛教研究所研究員)

【注】

- (1)『肇論研究』において福永光司氏は「僧肇と老莊」において、僧肇の思想と「莊子注」を記した郭象の思想を比較されている。僧肇における佛教理解に莊子からの影響があることが指摘されている。
- (2)『法華文句』卷八に僧叡が『法華經』二十八品を九轍に分け、その中に本迹無生転があり、本迹一なることを述べていたこと(大正藏三十四・一一四c)が記されている。吉藏の『法華玄論』には慧觀の本迹説が紹介(大正藏三十四・一五五b)されている。

(3)蓮華の喻えと本迹二門について(大正藏三十三・六八一b)



- (4)菅野博史氏『法華文句』における「四種釈」(『印度學仏教學研究』第五四卷一号所収 菅野氏は、『法華文句』の四種釈と『維摩經文疏』の解釈法をについて検討され、四種釈の中、約教釈・觀心釈は明確に見られ、因縁釈・本迹釈については明確な形では

出ないが一部共通する面が見て取れることを指摘している。また、花野充道氏は「智顕の法華經觀と四重興廢思想」(『法華仏教研究』九号所収)において維摩經疏にも本迹を説いているが、直ちに『法華文句』に説かれる本迹に結びつけられない。四種釈は法華經講釈に用いられるものであることを指摘している。

(5) 『維摩經玄疏』卷四 正しく維摩の本迹を明かす。(大正藏三十八・五四六c)

(6) 『法華經』と爾前の經典との異なりについては、古くから論義の一つとして論じられている。例えば爾前分身、爾前身土、爾前久遠などがある。

(7) 『維摩經玄疏』に理事、理教、教行、体用、權實の五つの本迹が述べられる。(大正藏三十八・四五五b)

(8) 三藏教に約して本迹を明かすなかに、「三藏教に約して本迹を明かさば、また四種の本迹を用うることを得るも、意はまた得ず。真・応の本迹を明かすは、なおこれ生死の人のことし。もし果地に至り、三十四心に結を断じ、成仏するを得ん時に、また五分法身をもつて本と為し、神通變化を迹となす。…(略)…また恐らくは有教無人、ことゝとくこれ円教の權迹なり。」(大正藏三十八・五四六b)とある。

(9) 拙稿 『注維摩經』における本と迹について(『仏教文化学会紀要 第二十号所収』)

